

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 10 日現在

機関番号：12613

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2012～2013

課題番号：24820017

研究課題名(和文)ハンセン病療養所を「開く」知としてのキリスト教

研究課題名(英文)Christianity as intelligence to open leprosy sanatoriums

研究代表者

石居 人也 (ISHII, HITONARI)

一橋大学・大学院社会学研究科・准教授

研究者番号：20635776

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円、(間接経費) 300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、近現代日本のハンセン病療養者(療養所に生きる在園者)のキリスト教受容が、隔離政策下にあった療養者の生(life)にいかなる意味をもったのかを、国立療養所大島青松園(香川県高松市)の霊交会に即して追究した。そしてキリスト教受容が、療養者と療養所スタッフの別を超えたつながりをもたらすとともに、療養所を外へと「開く」役割を果たしたことを提示した。また、霊交会員は、療養所の「自治」を中心に担うなど、信仰を超えた活動によってもネットワークを構築していたこと、療養者自らの「開く」力の及ぶ範囲は限定的だったことから、療養所内外の「社会」との関係に注視して検討を重ねる必要性も確認された。

研究成果の概要(英文)：This study explored what the acceptance of Christianity by people receiving treatment for leprosy (residents of leprosy sanatoriums) in modern Japan had meant for the lives of those people placed under the Government's quarantine policy, in line with the case of Reiko-Kai in the National Sanatorium Oshima-Seisho-En. The study demonstrated that the acceptance of Christianity by the residents had (1) created linkages between them and the sanatorium staff beyond their difference in standing and, at the same time, (2) played the role of opening the sanatorium to the outside. Additionally, the findings that (3) members of Reiko-Kai had also built networks through activities beyond their belief, such as taking the initiative in self-government of the sanatorium, and that (4) the reach of their own opening power had been limited confirmed the necessity of further discussions with a focus on residents' relations with societies inside and outside the sanatorium.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：日本史

キーワード：ハンセン病 療養所 キリスト教 信仰 自治 隔離 生 歴史

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 近現代日本のハンセン病をめぐるまとまった歴史研究は、藤野豊『日本ファシズムと医療』(岩波書店、1993年)を嚆矢とし、1996年の「らい予防法」廃止を契機として、急速にその数を増やしてきた。それらの多くは、従来「閉ざされた」場であった療養所に足を運んで聞きとりをおこなうオーラルヒストリーの手法をとるものと、そこに残された史料(歴史資料)にもとづいて療養所や療養者(療養所に生きる在園者)、ひいては隔離の歴史を描きだす文献史学の手法をとるものに大別される。そして、いずれの手法をとるにせよ、多くの研究が、戦後長きにわたって隔離政策が続けられてきた責任を、その直接的な遂行主体である行政当局者や医療従事者、医学研究者に帰するという枠組みのもとに、長いあいだ「閉ざされ」、正視されることのなかった療養所や隔離政策の実態を描きだそうとした。

(2) かかる研究の重要性をふまえたうえで、それら乗り越えようとする研究も現れはじめた。比較的早くからハンセン病者隔離の問題を社会の問題としてとらえることに意を用い、「隔離」を排除・隔離・忘却の連鎖が生みだす「病い」だと論じた武田徹『「隔離」という病い 近代日本の医療空間』(講談社、1997年)や、療養所外に生きる病者の処遇に着目し、病者をとり巻く社会に視点を据えながら隔離をめぐる時代状況を描きだした廣川和花『近代日本のハンセン病問題と地域社会』(大阪大学出版会、2011年)などは、その代表的なものといえよう。「らい予防法」廃止をうけてはじまった、療養者への賠償・補償をめぐる訴訟(1998年~2001年)と歩調をあわせるかのように研究が蓄積された時期を過ぎ、各療養所の療養者の平均年齢が80歳を超えるなか、ハンセン病とその病者の隔離をめぐる歴史研究は、隔離を実際に推し進める場となった療養所・社会と、その構成員を視野に入れたものへと移行した。

(3) ハンセン病や隔離をめぐる問題を社会との関わりで考えようとする時、ひとつの切り口となるのが宗教であり、当該分野では、とくにキリスト教に関する研究が蓄積されてきた。荒井英子『ハンセン病とキリスト教』(岩波書店、1996年)、森幹郎『足跡は消えても ハンセン病史上のキリスト者たち』(ヨルダン社、1996年)、杉山博昭『キリスト教ハンセン病救済運動の軌跡』(大学教育出版、2009年)などは、キリスト教における宗教的な救済の対象、あるいはキリスト教思想にもとづく社会事業における救済の対象としてハンセン病者に注目し、かれらと向きあったキリスト教やキリスト者との関わりで、ハンセン病や隔離をめぐる問題を考察した。

(4) 近現代の日本で、病や死、病者や死者と社会とがどのように向きあってきたのかに着目して、日本社会の特質をとらえることを、研究テーマとしてきた研究代表者にとって、ハンセン病をめぐる問題の考察は重要な柱のひとつであった。そこで、先行する阿部安成氏(滋賀大学経済学部)の調査に加わったかたちで、2009年より国立療養所大島青松園(香川県高松市)に入り、キリスト教信徒団体「霊交会」の教会堂で、膨大な史料の調査・整理をおこなってきた。そして、調査を進めるなかで、すべての病者が終生にわたって療養所に隔離され、「閉ざされた」空間のなかで生を全うせざるを得なかったという「絶対隔離」イメージを見なおす必要性を肌で感じた。それは、療養所という限られた空間のなかで生きながら、さまざまな回路を通じて外の世界とのコンタクトをはかり、場合によっては、実際に療養所外に足を踏みだしていた療養者の存在に、史料を介して触れたことによる。そうした回路のうち、主要なものひとつであるキリスト教に着目したことによって、本研究は開始された。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、近現代日本のハンセン病療養者のキリスト教受容が、隔離政策のもとにあった療養所に生きる在園者にとっていかなる意味をもつものだったのかを、主として国立療養所大島青松園のキリスト教信徒団体「霊交会」に即して明らかにすることである。とりわけ、以下の(2)~(4)について検討することを目的とした。

(2) 療養者と療養所スタッフとの関係が、とかく断絶の相で語られがちなハンセン病療養所において、キリスト教信仰が、療養所内におけるいかなる人的なネットワークの構築をもたらしただのかを明らかにする。

(3) 往々にして「閉ざされた」場として表象されてきた療養所が、信仰を介して、療養所外の世界とどのように架橋され、隔離された療養者が社会といかなるつながりをもつこととなったのかを明らかにする。

(4) 療養所内外にわたるネットワークの構築を可能にしたキリスト教が、療養所をおもな場として生きる療養者の生(life)にいかなる意味をもったのかについて、分析する。

## 3. 研究の方法

(1) 本研究は、国立療養所大島青松園で組織されたキリスト教信徒団体「霊交会」の教会堂での史料調査、史料の写真撮影、史料に関連する情報および史料の所在についての聞きとりと、それらをふまえた分析・検討を中心におこなうものである。学術的な調査・研究には、調査先との信頼関係の構築が不可欠なことはいうまでもないが、その調査・研

究が差別や人権に関わるような場合は、より慎重かつ丁寧な対応が求められる。研究代表者は従来、国立療養所大島青松園に年数回のペースで足を運び続け、史料調査のみならず、霊交会や入所者自治会の方々などとの交流をもってきた。すると、何気ない日常的な会話のなかで、未知の史料についての情報がもたらされることが少なからずあった。そこで、史料調査・聞きとりをめぐっては、従来の交流・調査のなかで構築した、霊交会との信頼関係にもとづいて、継続的かつ高い頻度で足を運んで信頼関係を維持・確立するよう努めた(2012年度に8回、2013年度に5回訪問)。

(2)本研究で調査対象としている史料は、基本的には霊交会の教会堂内にある「図書室」と呼ばれる部屋で保管されている。所在自体は、かつておこなった史料調査(内容および成果については滋賀大学経済学部 Working Paper Series として公開)によって確認できている。史料調査では、従来作成した目録にもとづいて、霊交会の活動について記述のある史料、および療養所外の個人や団体から霊交会に寄贈された紙誌類をあらかじめピックアップしたうえで、現地調査をおこなった。ただし、図書室は現在も日常的に用いられているうえ、史料の管理者が常駐しているわけではない。それゆえ、さきの調査以降に配架場所が変わってしまったり、行方がわからなくなってしまうといった貴重な史料もあった。現地では、そうした史料の所在の再調査もおこなったうえで、あらかじめピックアップした史料の内容、書き込まれている事柄、挟み込まれているものなどについての調査および写真撮影をおこなった。

(3)調査や交流を続けるなかで、新しい史料が提供されたり、史料やその所在についての情報もたらされたりすることも、珍しくはなかった。また、霊交会は高齢者の組織でもあるため、史料調査と併行して関係者への聞きとりをおこなうことによって、情報の積極的な収集および情報精度の向上にも努めたが、その過程でもやはり、新たな史料や情報もたらされた。そうした際には、もたらされた史料や情報について、概要の把握・確認をおこなったうえで、調査・整理を急ぐ必要性と、本研究課題との関連性を指標として判断をくだし、急ぐ必要がある場合には、史料一点一点について調査をおこない、史料のまとまりごとに目録を作成して公開(滋賀大学経済学部 Working Paper Series)した。当該誌はwebでも公開されているため、目録はwebでも閲覧可能となっている。以上のような経緯から、本研究課題の調査・研究が当初計画の枠に収まりきらないであろうことはある程度折り込み済みだったわけだが、こうした「誤算」は、中長期的に見れば歓迎すべきものと考えている。

(4)現地調査後は、研究代表者の研究室において、撮影史料の整理・分析・検討、および新たに調査・整理した史料の目録の作成をすすめ、随時成果を論文・口頭報告などによって公開した。

#### 4. 研究成果

本研究では、近現代日本のハンセン病療養者のキリスト教受容が、隔離政策下にあった療養者の生にもった意味を、国立療養所大島青松園の霊交会に即して追究した。その結果、以下の(1)~(8)に示すような成果を得ることができた。

(1)霊交会の活動を記録した機関誌『霊交』や『週報』の記事、および挟み込み史料の分析によって、キリスト教の受容が、信仰という回路をとおして、療養所内における療養者と療養所スタッフの別を超えたつながりをもたらすことを可能にしていたことを明らかにした。それは、日常における医療を施される者と施す者、世話される者とする者、管理される者とする者といった関係性を、限定的にはあれ柵あげするものだった。

(2)霊交会に寄せられた各地のキリスト教信徒団体の機関紙誌、および挟み込み史料の分析などによって、キリスト教の受容が、信仰という回路をとおして、療養所外の個人・団体とのつながりを可能にしていたことを明らかにした。そこには、各地の療養所内のキリスト教信徒団体が含まれていたことはもちろん、療養所外のさまざまな信徒団体も含まれている。高松市や香川県が多いことはいうまでもないが、瀬戸内海域にとどまらない広範な地域が含まれている。一方、霊交会自らがそれらの個人や団体に、自らの機関誌を寄贈していたことも判明しており、信仰を同じくする療養所外の個人・団体との紙誌交換によって、ネットワークが形成されていたことが明らかになった。また、紙誌交換にとどまらず、療養所外の個人・団体の往来もみられ、キリスト教の信仰が療養所を外の世界へと「開く」役割を果たしていたことを提示した。

(3)療養所内外にわたるつながりをもたらし、療養所を「開く」ネットワーク・ツールとして機能したキリスト教は、単なる信仰や、信仰にもとづく救済・社会事業というにとどまらず、「閉ざされた」療養所を「開く」知として機能することで、隔離政策下にある療養者にとって、隔離されつつ「主体」的に生きる縁となった。

(4)霊交会のキリスト教信徒たちは一方で、療養者による「自治」活動を中心的に担うなど、信仰を超えた領域での活動によっても、ネットワークを構築していた。このことは、信仰のみが療養所内のつながりの媒となっ

ていたわけではかならずしもないことを意味しており、療養所内「社会」の様相を幅広くとらえる必要性を提起している。だが、「自治」活動は基本的に療養者によって担われるものであり、療養所内を貫く媒とはなり得ていないことには注意が必要である。

(5) 自らが発行した紙誌の発送・交換などを通じた、療養者自らが療養所を「開く」試みは、高松・香川・瀬戸内を起点にキリスト教の信仰ネットワークを介して広がったが、その力の及ぶ範囲が信仰ネットワークを超えて広がる機会は限られていた。そうした構造を明らかにするためには、療養所をとり巻く社会との関係も視野に入れたうえで検討を重ねる必要がある。

(6) キリスト教信仰を、ひとつのネットワーク・ツールととらえることで、従来、宗教史および社会事業史的な観点から言及されることが多かった、ハンセン病とキリスト教との関係を社会的な観点からとらえなおすことに道を拓いた。

(7) ハンセン病療養所を「開く」知としてキリスト教をとらえることによって、療養所をただひたすらに「閉ざされた」場として描く視点から解き放ち、「絶対隔離」イメージを相対化して、隔離の内実を社会との接点で問うための端緒として位置づけうる。今後も調査を継続することで、問いの深化をはかる必要がある。

(8) 以上をとおして、本研究は、ハンセン病者の隔離をめぐる問題を、「絶対隔離」イメージに縛られることなく社会的な観点からとらえなおし、日本の近現代社会の様相の一端を描きだした。それに加えて、高齢化が進み、療養者自身の口から「終末期」という言葉がしばしば聞かれるようになっている療養所で、史料を調査・撮影するだけでなく、療養者の方々との交流を深め、同じ機会を二度とは得ることができない対話をつみ重ねることも、療養所や隔離の歴史を社会的な文脈から描きだす、重要なプロセスになることを実践的に示した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

石居人也、隔離される者/する者にとっての「地域」 瀬戸内海のハンセン病療養所をめぐって、人民の歴史学、査読無、201号、2014、9月発行予定

阿部安成、石居人也、父母に抱かれた「聖者」のひと 国立療養所大島青松園在住者の顕彰、滋賀大学経済学部 Working Paper Series、査読無、208、2014、pp.22-28、

<http://libdSPACE.biwako.shiga-u.ac.jp>

/dSPACE/bitstream/10441/12973/1/No208.pdf

阿部安成、石居人也、信仰とメディア 国立療養所大島青松園キリスト教霊交会という場、滋賀大学経済学部 Working Paper Series、査読無、197、2013、pp.14-23、

<http://libdSPACE.biwako.shiga-u.ac.jp/dSPACE/bitstream/10441/12104/1/No197.pdf>

阿部安成、石居人也、香川県大島の療養所に展開した自治の痕跡 療養所空間における生環境をめぐる実証研究、滋賀大学環境総合研究センター研究年報、査読無、10巻1号、2013、pp.49-68

阿部安成、石居人也、松岡弘之、自治のオリジン 瀬戸内海の大島における自治活動の手書き日誌、滋賀大学経済学部 Working Paper Series、査読無、172、2012、pp.11-19、

<http://mokuROKU.biwako.shiga-u.ac.jp/WP/No172.pdf>

〔学会発表〕(計5件)

石居人也、隔離される者/する者にとっての「地域」 瀬戸内海のハンセン病療養所をめぐって、第48回東京歴史科学研究会大会、2014年4月27日、早稲田大学(東京都)

石居人也、歴史学の研究手法・環境とオープンアクセス 日本近現代史研究の現場から、第2回 SPARC Japan セミナー、2013年8月23日、国立情報学研究所(東京都)

阿部安成、石居人也、信仰とメディア キリスト教霊交会という場、第60回四国人権教育研究大会、2013年7月11日、サンポートホール高松(香川県)

石居人也、隔離政策下のハンセン病療養所における信仰と交流 香川県大島のキリスト教にみる、第71回経済史研究会、2013年6月8日、大阪経済大学(大阪府)

石居人也、ハンセン病療養所を「開く」 20世紀日本の療養所におけるキリスト教、「歴史と人間」研究会、2012年11月25日、一橋大学(東京都)

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

石居 人也 (ISHII, HITONARI)

一橋大学・大学院社会学研究科・准教授  
研究者番号：20635776